

Title	リオン・フォイトヴァンガーとアメリカ
Author(s)	奥田, 敏広
Citation	ドイツ文学研究 (1997), 42: 67-92
Issue Date	1997-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/185427">http://hdl.handle.net/2433/185427</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# リオン・フォイヒトヴァンガーとアメリカ

奥田敏広

## はじめに

リオン・フォイヒトヴァンガーといえば、モスクワで出ていたドイツ人亡命作家たちの雑誌『ダス・ヴォルト（ことば）』のプレヒトやヴィリ・ブレーデルと並ぶ編集者として有名であり、そして何よりもあのジツドの『ソヴィエト紀行』に対抗して書かれ、ほとんど手放しでスターリン・ソヴィエトを褒め上げた悪評高い『モスクワ一九三七年』によって親ソヴィエト的な作家と見做されがちであるが、実際には彼はその亡命生活の多くをアメリカで過ごし、その後の戦後もアメリカに留まり、亡くなる一九五八年までの合計二〇年あまりにも及びアメリカで生活しているのみならず、その代表作の中には一見アメリカを賛美しているかのような作品さえ存在している。本稿においては、日本やドイツにおいては問題にされることのほとんどない<sup>1</sup> 这样一种アメリカ時代のフォイヒトヴァンガーを取り上げ、彼が当時書いたふたつの作品、すなわち『Die Füchse im Weinberg（葡萄山の狐たち）』と『Wahn oder der Teufel in Boston（狂気、あるいはボストンの悪魔）』を分析することを中心にして、フォイヒトヴァンガーのアメリカ観とその問題点について検討したい。

ヨーロッパにおけるアメリカ観の古典ともいべき『アメリカにおけるデモクラシー』（一八四〇年）の中ですでにトクヴィルは、アメリカン・デモクラシーを高く評価しつつも、「アメリカ連邦におけるほどに、哲学が人々の心を少ししか占めていない国は外にはない」と述べているが、<sup>(2)</sup> こういうアメリカに好意的な本の中にもついつい出てくる我々日本人にも馴染みの深いアメリカ観、すなわち、古い文化的伝統を誇るヨーロッパに対してモノとカネ、ビジネスとテクノロジー、多数決と実用主義に終始する国という否定的なアメリカ観が、ユートピアとしてのアメリカ観の一方で当然のことながらヨーロッパにおいても古くから存在していた。そして現在では、とくにヴェトナム戦争以降、人種問題や麻薬と銃の犯罪問題が深刻化し病める大国アメリカという相貌が顕著になり、さまざまな形でアメリカニズムの終焉が云々されて久しい。<sup>(3)</sup> こういう世界におけるアメリカ像が大きく否定的方向に傾いている中で、親ソヴィエト的なドイツ人亡命者であり、実際アメリカの技術・物質文明を風刺したこともある<sup>(4)</sup> フォイヒトヴァンガーが、建国以来の大きな転換期のひとつにあつた三〇年代から五〇年代にかけてのアメリカを過去においてどのように評価していたのかは、単にこの作家ひとりの問題に留まらず、現在におけるアメリカとアメリカニズムの問題や、およそ異文化の交渉と評価の問題を考えるにあたって興味深い示唆を与えてくれるものと思われる。

## 第一章 アメリカ独立革命と反ファシズム亡命者

さて、すでに三〇年代初頭からフォイヒトヴァンガーがその構想をもち一九四七年にようやくその第一部が発

表された大部な三部作で、疑いもなくこの作家の代表作のひとつである『葡萄山の狐たち』（以後『狐たち』と表記）を一読すると、意外なことにも『モスクワ 一九三七年』を書いた同じ作家の作品だとは信じられないほど、一見それはアメリカを絶賛した小説のように見える。というのも、小説は、アメリカが市民的自由の旗を掲げてイギリス王ジョージ三世に立ち向かった、君主制を打破し人民主権の共和制を打ち立てようとするきわめて革命的なものとしてのアメリカ独立戦争を描いているからである。物語の中では、当時の圧政が支配するヨーロッパの絶対主義国家群に対しアメリカが理性と進歩の代名詞とされている。なるほど、作者自身は、

この本の主人公は、一八世紀に発見され、一九世紀にはつきりと認識され、記述され、賞賛された、そして二〇世紀には厳しく否定され、中傷されることになるあの歴史の目に見えない導き手、すなわち進歩である。

と解説しているが、この作品が書かれたのは二〇世紀であるにもかかわらず、この説明の後半にある視点、すなわち進歩を疑問視する視点は小説の中ではまったくと言っていいほど欠如している。実際また、この小説が戦後のヨーロッパで出版されたとき、現在は第一部の表題になっている『Waffen für Amerika（アメリカのための武器）』というタイトルがついていたこともあって、共産圏においてそのアメリカ賛美の姿勢を非難する批評が出、一時作品の出版が禁止されたことさえあったほどである（ヨーロッパにおける受容をめぐる問題についてはまた後で詳しく言及する）。

しかし、そういう受け取り方は、少なくとも次のような点をきちんと踏まえるなら明らかに誤解であることが

分かる。つまり、この小説において賞賛されるアメリカとはあくまでアメリカ独立戦争時代のアメリカであつて、すでに世界最大の権力国家に変貌した二〇世紀前半の作者が生きていた時代のアメリカではないという事実である。さらに、この点に注目するなら、そういう国際政治の場において決定的な力をもつ同時代のアメリカは、また別の形で小説の中に描かれているのが透けて見えてくる。すなわち、小説『狐たち』はアメリカ独立戦争を正面から描いたものではなく、むしろそこにおいて絶対主義国家フランスが演じた役割を描いているが、そういう世界情勢の中で決定的重要性をもつた一八世紀末の絶対主義国家フランスこそ、実は作者も含めた寄る辺ない亡命者たちが頼らざるをえなかつた二〇世紀前半のアメリカではないか、ということである。

アメリカ独立戦争において、フランスのアメリカ側についての参戦がことの成否にいかにかに決定的な意味をもつたか、そしてまた、フランスがアメリカ側につくまでにいかにかに多くの障害があつたかはよく知られている。そこには、君主制を崩そうとするアメリカを絶対主義国家フランスがなぜ助けるのかという根本的矛盾があつたし、その上イギリス領アメリカが「フランス人とインディアンとに対する戦争」を戦つたのはまだつい前のことであつた。しかし一方また、イギリスとフランスの間にも世界の覇権をめぐる長年の確執があり、七年戦争に敗れたフランスはイギリスへの復讐の機会を窺つていた。小説は、こういう世界情勢の中であのルイ一六世とマリイ・アントワネットの宮廷に渦巻いていたさまざまの思惑や策動を詳しく描いているが、こういう国際情勢をめぐる現実政治の側面をなるほどきちんと踏まえながら、しかし、小説の中心にあるのはむしろそこにおける市民的個人の活動とその意味とでもいうべきものである。すなわち、フランスの協力を得るべくパリにやってきたアメリカ人ベンジャミン・フランクリンと、独立戦争の革命的側面に共感し個人の負担で武器と船をアメリカに送

ろうとしたフランス人ピエール・ポーマルシェの活動である。なるほど作者は、「フランクリンやポーマルシェが問題なのではなく、歴史上の出来事の意味が問題なのです」と説明しており、<sup>(1)</sup> 実際また最初の「ポーマルシェ・プラン」が現在の長編小説へ変貌していく過程で実にさまざまの人物に単なる脇役以上の証明が当てられることになるが、しかし、それでもなおフランクリンとポーマルシェのふたりがこの長大な小説の中心であることは、かれらに費やされているページ数からいっても当然であろう。

そして、この二人をめぐる展開に注目し、アメリカ独立戦争時代の絶対主義国家フランスと第二次世界大戦時代のアメリカを並置するなら、反ファシズム亡命作家であるフォイヒトヴァンガーがなぜこの時期にこの小説を書いたのか、その理由が分かるように思われる。すなわち、人民主権の市民的自由を実現すべくイギリス王に対する戦いにおいて国外で援助を請うフランクリンの姿を通して、小説「狐たち」の作者は、ヒトラー・ナチスの独裁に対する戦いにおいて亡命の地において協力を呼びかけるドイツ人亡命者たちを描こうとしたのではないかと考えられるのである。正式な全権大使であるフランクリンと国を追われた亡命者を比べるとは無理があるという異論があるかもしれないが、しかし、小説は、独立宣言当時のアメリカがヨーロッパ列強にとつて独立国というよりもまだイギリス王国内の反乱軍にすぎず、まとまった一団というよりも一三州の寄り合いに過ぎなかったという側面を強調することによって、フランクリンの立場を統一国家の特使というよりも亡命者たちのそれに限りなく近づけている。実際またこういうパラレルな関係に注目するなら、この他にも作者が亡命者として体験した現実が、数多くこのフランクリンをめぐる展開の中に見えてくる。

たとえば、多くの亡命者がとくに独ソ不可侵条約が結ばれて以降はアメリカに頼るしかなかったように、小説

においてもフランクリンのアメリカが独立戦争を生き延びるには、フランスの援助がどうしても必要でありフランスに頼らざるをえない。そしてまた、そういう寄る辺ない状況であるにもかかわらず、亡命作家たちのなかにはもっぱら自分たちの戦いが正義の戦いであることを執拗に言い立てるばかりで、必ずしもアメリカに頼る必要はないというような態度が見られたのとちょうど同じように、小説においてもまた、フランクリンの同僚のひとりであり熱狂的な独立派・進歩派であるアーサー・リーは独立革命の正当性を説くばかりで、国際政治におけるフランスの立場を考慮するフランクリンを卑屈であるとしきりに非難する。一方のフランクリンは、権力政治の現実を冷徹に見つめ、さしあたっては好機を待ちつつ表面的には人のよい無為を演じるが、そういうフランクリンの姿は、小説の中でいい意味での狡猾さ、したたかさとしてきわめて肯定的に描かれており、全体の題名に出てくる「狐」もここに由来している。こういう点にもまた、最初はすぐに帰国できると思っていたフォイヒトヴァンガーが、フランスから海の彼方のアメリカまで渡り歩いた長年の亡命生活から学ばざるを得なかった知恵が投影されているに違いない。フォイヒトヴァンガーは彼の作品では現在もっとも有名なあの『亡命』、『成功』などの連作を『待合室』三部作と名付けたが、そこでは否応なしの運命であった待機、待つことが、小説『狐たち』においてはむしろ積極的な戦略として描かれているのである。

かれらが我慢できなくなっているというのも、もっともなことだった。彼自身にしても、ここで何もせず安閑としているのは苦痛だった。しかし、そうする以外に道はないのだ。悪い循環にはまってしまっていた。戦争の情勢が悪いのでフランスとの同盟がどうしても必要になるが、戦況が好転しないかぎり、ヴェルサイ

ユを同盟に引き込むのは不可能だった。(F三三七)

我々は正しい時を待ち、それを捕まえるすべをこころえなければならぬのだ。(F五〇五)

小説においてはまた、そういうフランクリンの姿が「あなたは流行なのだ」(F三三九)という友人の言葉に端的に表れているように、科学者・著述家としての世界的名声を利用してフランス市民や社交界の偶像に甘んじているとして同僚たちの嫉妬を煽るが、これまたアメリカにおいてもベストセラー作家であった作者が多くの不遇な亡命者たちから実際に経験しなければならなかったことだと思われる。さらにまた、小説は、そういう嫉妬や対立が対フランクリンという形で存在しているだけではなく、ともに熱狂的な革命派である先のアーサー・リーともうひとりの特使サイラス・ディーンの間にも根深い対立があることを描いており、亡命者たちの間にそれこそさまざまな対立が存在し、反ナチズム統一戦線が容易に形成されない一因となっていたことを思い出させる。最後に、小説は、七一歳というフランクリンの老齢を絶えず強調し、もしかしたら異国のパリでアメリカ独立を見ないまま死ぬかもしれないという不安を描いているが、これまた長年の亡命生活によりすでに六〇歳を過ぎていた作者自身の現実の不安を反映したものと考えられる。

それにしても、こういう照応関係に注目し、アメリカ独立戦争時代の絶対主義国家フランスと第二次世界大戦時代の資本主義国家アメリカを並べて考えるなら、この構図から浮かび上がる作者のアメリカ観は、先にふれた共産圏での批評に見られるようなアメリカを賛美したものでは決してなく、むしろかなり否定的なものだと言わねばならない。古くその内部から朽ち果てようとしている革命前夜の絶対主義国家フランスが、はからずもその



意に反してアメリカの独立というへ独裁からの解放へに手をかすことになるように、第二次大戦における資本主義国家アメリカもまたその社会自体は行き詰まり所詮は没落する運命にあるにもかかわらず、亡命者たちのへ独裁からの解放へを助けたのだ、という解釈が成立するからである。また前者がアメリカ独立戦争を支援するのがその革命的理念に共感してのことではなく、その世界戦略的な野心のためであるのとちょうど同じように、後者がナチス・ドイツと戦うのも、その非道を糾弾するためというよりもむしろ世界の覇権を求めてのことだということになる。

しかしながら、かといってまた、この小説における作者の同時代のアメリカへの態度は、頭から否定し、拒絶するものだと言うこともできない。なぜなら、小説『狐たち』は、そういう国際政治の利益と力学で動くフランス宮廷と同時に、フランクリンと並ぶ中心人物であるピエール・ポーマルシエに代表されるような、独立戦争の革命的理念に共感し、財産や生命を危険に晒してまで協力しようとする数多くの市民の尽力も描いているからである。これまた、亡命者としての作者が現実のアメリカで体験した、というかむしろ将来のこととして強く期待していた個人的好意や援助が踏まえられているに違いない。しかも小説は最晩年のヴォルテールを描くことによって、独立戦争の理念が他ならないフランスの啓蒙思想家たちによって生み出されたものである点に注目しているのである。さらに、作者が直接描くアメリカは、なるほどさまざまな問題を抱えているものの、進歩的・革命的な側面を確かにもつていた独立戦争時代のアメリカである。

要するに、このように考えてくるなら、小説『狐たち』の作者のアメリカ観は、共産圏の批判に見られたよう

なアメリカを賛美するものでは決してないが、かといってまたアメリカを批判するものでもなく、アメリカの否定的側面を踏まえながらも、あえてその肯定的側面に注目し、期待を込めてそれを強調しようとするものだと見える。ただし、この後アメリカがきわめて反動的な時代を迎えても、こういう彼のアメリカ観に変化はなかったのだろうか。次章ではさらにこの問題を検討したい。

## 第二章 魔女狩りとマツカーシー旋風

戦後のマツカーシー旋風が吹き荒れるアメリカの反動性については、それが単なる反共主義を通り過ぎて市民的自由を侵害するまでに至っていたことはよく知られている。それは単なる噂や中傷によって国会や裁判所が動いたり、気に入らない者は皆「非米的 (unamerican)」という言葉で葬りさられるようになった結果、誰もが小翼翼々として疑心暗鬼になり、社会全体が政治的な集団的狂気ともいうべき状態に陥った状態であった。このマツカーシー旋風のいわばプロローグとなったのが、アメリカ文化の象徴的存在のひとつであるハリウッド映画界の調査と喚問であり、下院の常設委員会のひとつであった非米活動委員会に喚問されて証言する映画人にとつては、共産主義に関する情報を提供するか、あるいはそれをしない場合は、共産主義者として葬りさられるか議会侮辱罪による刑に服するという選択の自由しか残されていない、きわめて一方的なものであった。周知のように、一九四七年一〇月三〇日にこの委員会で証言させられたプレヒトなどは、身の危険を感じてさっそくその翌日の三一日に飛行機でパリに向かいそれから二度とアメリカに帰ってくることはなかった。

そして、こういうアメリカの変化に対しては、元来アメリカに好意をもっていなかったブレヒトのような作家ばかりではなく、三〇年代から戦争中にかけてはルーズヴェルトに代表されるニューディーラーたちのリベラルなアメリカに大きな期待を寄せ、実際またその功績を評価もしてきたトーマス・マンのような作家までもが、大きな失望と危惧を感じざるをえなかったということもまたよく知られている。しかし、新たな手紙や、何よりも近年完結した日記の出版によつて、それは単に危惧といったような生やさしいものではなく、実際には非常な憤慨と嫌悪にまで至つていたのである。具体的で生々しい形で明らかになりつつある。たとえば、このころマンは日記にしきりに「一九三三年のアローザの記憶を生き生きと」思いだし、「二度目の亡命の考えがずっと前からとりついて離れない」と書いてある。なかには、「状況は一九三三年よりひどくより危険である」という記述さえ見られる。<sup>(9)</sup> すなわち、マンには、朝鮮戦争に深入りするアメリカと全権賦与法によつてヒトラー独裁となつた一九三三年のドイツ第三帝国が重なり合はずにはいけないのであり、ここにいたつてマンは、かつて反ファシズム亡命者たちを受け入れ、実際またヒトラー・ドイツと戦いもしたアメリカをこともあろうにあのナチス第三帝国と重ね合わせて考えているのである。

こういう状況の中で、やはり反ファシズム亡命作家の代表者のひとりであつたフォイヒトヴァンガーは、そういうアメリカの変質をどのように考えていたのだろうか？

この点でまず確認しておかねばならないのは、ソヴィエトに好意を持つフォイヒトヴァンガーは、戦後のアメリカの変質を当然憂慮すべきこととして非難をもつて眺めていたというか、むしろその甚大な被害を直接受けていたという事実である。すなわち、彼は反アメリカ的活動をしているというジャーナリズムによる中傷に苦しめ

られており、たとえば一九五二年一月十六日付けの手紙では、そういう中傷が大きな原因のひとつとなつてアメリカを逃げ出したトーマス・マンに宛てて、同じような理由でアメリカを出たあのチャップリンを例にあげながら新聞や雑誌のひどい事実歪曲ぶりを訴えている。<sup>(10)</sup>

大統領選挙以来の新聞は文字通り正気の沙汰ではありません。とくにここ西部の新聞においてでっち上げられることは、ヨーロッパの人間にとつては愚者の叫びのように聞こえます。たとえばチャップリンの場合私には事実とその表現を非常に正確に比較できますが、大衆の海のように深い愚鈍さを確信している者にとつてさえ、そのようなばかげた嘘を提供することが許されているのは、永久に理解できないことです。

さらに、フォイヒトヴァンガーの場合はこういうジャーナリズムによる中傷に加えて、マンなどとは違いアメリカ国籍をまだもつておらず、当時それを申請中であつたために連邦移民局（INS）から審問を受けており、その公開資料を調べた研究者が報告しているように、<sup>(11)</sup> INSが連邦捜査局（FBI）との綿密な協力体制のもとにおこなう厳しい喚問に苦しめられねばならなかつた。そこでは、あの非米活動委員会さながらの容赦ない質問が執拗に浴びせられ、首尾よく切り抜けようと思ふなら、「記憶にない」とか「分かりません」というごまかしの常套句ばかりではなく、ときには嘘をつく必要さえあり、被喚問者はきわめて苦しい道徳的苦痛を強いられるのであつた。

そして、この時期にそういう苦しい体験をしながら、変質するアメリカ社会への非難を込めてフォイヒトヴァ

ンガーが書き上げたと思われるのが、一七世紀後半のマサチューセッツ植民地において実際にあった魔女裁判を素材にした戯曲『狂気、あるいはポストンの悪魔』（以後『ポストンの悪魔』と表記）である。非米活動委員会が伝統的なピューリタン生活にノスタルジアをもつ保守的農民層の支持を背景にしていたことは周知の事実であり、そういう社会の原型である初期マサチューセッツ植民地を舞台にした魔女裁判を描く作者に、非米活動委員会を現代の魔女裁判として非難する意図は当然あったと考えられる。たとえば、戯曲の中では、

恐ろしいのは、これらの裁判の方法です。身の潔白を証明しようと試みる者が絞首刑にされ、自らの魔術を認め、そして他人を告発するものが生かしておかれるのです。(W一七二)

と語られる場面があり、魔女裁判がそういう方法で芋づる式に被告を増やし社会をパニックに陥れる状況が描かれているが、それは知っている関係者の名前を挙げれば放免されるという非米活動委員会の喚問がひきおこす状況でもある。実際また、この戯曲は、プレヒトへの手紙の中で述べられているように「魔女狩りの政治的背景、すなわち魔女狩りと植民地政治の関係」を強調している。つまり、戯曲は、イギリス本国からの解放を目指す一派に対してあくまで本国への忠誠を求める一派にとって、自らの陣営を強化し結束を固め、そしてまた解放派への関心をそぐという点でそのような一大宗教的スキヤンダルがいかに好都合であったかを描いている。一方、戦後のマッカーシー旋風においても、それが東西冷戦という大きな国際政治の動きを背景として起こったことは言うまでもない。そして、こういう「政治的」要素を作者がいかに重要だと感じていたかは、たとえば一九四九

年三月一五日のフランクフルトでの初演に対して彼が、「政治的なものが抑圧され、コトン・メザールの物語がひとつの病理学的研究にされている」と不満を漏らしているのを見ても明らかである。

しかしながら、私がここで注目したいのは、フォイヒトヴァンガーがアメリカ社会を非難する場合、魔女狩りというまさに反近代的な現象を利用しているという点である。すなわち、冒頭でも言及したように、戦後アメリカの問題点は近代合理主義の行き詰まりと深く関係していると現在ではしばしば考えられているにもかかわらず、作者のアメリカ批判にそういう視点はまったくと言っていいほど見られない。このことは、M・トウエイン、H・メルヴィル、H・D・ソローらに典型的に見られるように世俗的な道徳意識や物質的な成功という点でフランクリンを圧倒的に批判してきたアメリカ文学の伝統とはまさに対照的に、小説『狐たち』が「科学者」フランクリンを極めて肯定的に描いていたという事実とも符合する。「この国はそこに何でも書き込める真っ白い紙なのだ」(F五七九) というアメリカへの作者の期待は、ヨーロッパで生まれながら過去のさまざまなしがらみのためにそこでは展開に障害があつた合理主義や啓蒙主義が、アメリカでは自由に発展できる可能性をもっているがゆえであり、一方彼のアメリカへの非難は、狂信と蒙昧を土壌とした魔女狩りという反近代的状態、文字通りの反動に向けられている。実際またそういう反近代的な蒙昧が戦後のアメリカ社会にもまだ確かに存在する、というか復活しているという現状認識が彼にあつたことを示しているのが『ポストンの悪魔』という作品に他ならない。このことは、安易に近代合理主義の行き詰まりを云々しがちな現在の我々に、ポストモダンのきらびやかな衣装を纏って現れる近代批判の中に往々にして反動と野蠻が隠れていないか、反省させるものがあるように思われる。なるほど五〇年代前後のこの段階では、現在のアメリカが抱える問題点がまだその独特の風貌を現して

いなかったということもある程度事実であろうし、またフォイヒトヴァンガーの視点には、啓蒙がかえつて野蠻を生み出すという「啓蒙の弁証法」に対する認識が希薄なものも事実であろう。しかし、たとえば現在のいわゆる文化相対主義などに特徴的な近代欧米社会の理念への非難の方もまた、あまりにも短絡的なものでないか、<sup>(15)</sup>確かに一度よく考えてみる必要があるに違いない。

### 第三章 アメリカという名の「スケープ・ゴート」

それにしても、戯曲『ポストンの悪魔』がマッカーシー時代の政治的な反動性や、それを生み出す土壌、母胎としての禁欲的で保守的なアメリカ社会を一方的に告発し、弾劾しているのかという点、実はそうではない。このことは、フォイヒトヴァンガーの戯曲とまったく同じ素材をもとに、しかもほぼ同じ時代に書き上げられたもうひとつの戯曲、すなわち国際ペンの会長も務めたアメリカの現代作家であり、あのマリリン・モンローとの結婚でも有名なアーサー・ミラーの『るつぼ』と比較すればよく分かると思われる。フォイヒトヴァンガーの戯曲に遅れること六年、まさにマッカーシー旋風のただ中で完成したミラーの『るつぼ』も、時代的制約を否定する作者の発言もあるが、近年出版されたその自伝でも確認されるように、<sup>(16)</sup>魔女裁判のもとに当時の反動的な政治的・社会的状況を描くことをテーマとしている。ミラー自身、一九五六年六月に下院非米活動委員会に喚問されたとき証言を拒否したために、控訴審では無罪になるものの、第一審では議会侮辱罪に問われるが、その前に親友のひとりであるエリア・カザンが証言をしたことに強い衝撃を受け、それが戯曲執筆の大きな動機になったよ

うである。

しかし、にもかかわらず、同じ素材をもとに同じようなテーマを扱ったこのふたつの戯曲を比較してみると、そこには大きな相違があるのが分かる。なるほど両者は、一六九二年にボストン近郊の寒村セイレムで、牧師パリスシユの娘と仲間の少女たちが真夜中に草原で肌同然の姿で踊ったり奇妙な振る舞いをしてるところを牧師に見つけられた、という一連の魔女裁判の端緒となる出来事は共通して取り上げているものの、その後の事件の扱い方には大きな違いがあるのである。まず、そもそも戯曲の中心となる人物が、ミラーの場合、魔女裁判の被告である農民ジョン・プロクターであるのに対して、フォイヒトヴァンガーの戯曲の場合は魔女裁判の統括指導者ともいべきコトン・メザー牧師であるという作者の視点の相違である。つまり、ミラーでは、魔女裁判がおもにその被害者の視点、被害者の苦悶や葛藤を通して描かれるのに対して、フォイヒトヴァンガーの関心と注目は魔女裁判の加害者に向けられている。もちろん、魔女裁判を単なる被害者と加害者、善玉と悪玉に分けて考えるのは問題があり、フォイヒトヴァンガーもミラーもそういう単純な分析方法を取っているのではない。しかし、魔女裁判も裁判のひとつである以上そこには告発者と被告という両極が存在するのは当然であり、その際注目すべきなのは、フォイヒトヴァンガーの場合、横暴な不正を振るい社会に恐怖をまき散らす魔女裁判の告発者に向けられる作者の目が、必ずしも非難と弾劾には終始せず、むしろ暖かいともいべき寛容なものであるという点である。

すなわち、先にこの魔女裁判のもつ政治的意図、国王忠誠派の思惑について触れたが、作者はそれを強調しながらもあくまでそれは結果的なもので、メザー牧師の意識的な目的ではなく、彼の魔女告発はあくまで神を畏れ



る純粹な宗教的熱情から出たものだと描いている。また、彼を敬いながら見守るその妻や息子の口から、彼が断食を熱心にやり過ぎることが何度も語られ、おそらくそのせいでも彼が宗教的幻覚を見やすくなっていることが暗示されている。そして何よりもそういうメザ―牧師と政治的・宗教的にはまさに反対の立場にあり、したがって全編を通してその点では彼を非難し続ける人物トーマス・コルマンを通して、牧師が一面においてもつ能力と人格の高潔さが賞賛される。すなわち、学生時代から牧師を知っており、いまではその妹が牧師の妻となっているコルマンは、魔女裁判におけるメザ―牧師を厳しく批判しながらも、彼を見捨てることはない。戯曲の冒頭近くでメザ―牧師を非難しながらも、「もし誰か君の長所が分かる人間がいるとすれば、それは僕だ」(W一四五)と語るコルマンは、魔女裁判に対する反発がようやく始まり魔女狩りを収束させなければならなくなった戯曲の結末においても、なお牧師に「僕たちは君の力を評価することができ。りっぱな同盟を結ぼうではないか」(W二二二)と救いの手を差し伸べる。

一方ミラーの戯曲においては、物語の中心になるのは被告人たちであり、なかでもそのひとりの農民ジョン・プロクターの苦悩に作者の興味は注がれている。すなわち、ついつい誘惑に負け家事手伝いの少女アビゲイルと一度寝てしまった彼は、すぐに後悔し以後はアビゲイルに冷たくするが、それにうすうす気づいた妻のエリザベスはアビゲイルを解雇する。一方解雇されたアビゲイルの方はジョンが忘れられず、始めはエリザベスを亡き者にしようとして彼女を魔女だと、そして後では相変わず冷たいジョンをも魔女の手先だと言いつらす。物語は、そういうアビゲイルの中傷をはね返すためには自らの姦淫の罪も告白しなければならぬ夫ジョンと、そのジョンを信じながらも夫はアビゲイルを本当に愛しているのではないかという一抹の疑惑を捨てきれない妻エリザベ

スというプロクター夫妻の苦悩と煩悶を中心に展開する。ここで注意すべきことは、アビゲイルの魔女呼ばわりをジョン・プロクターに「娼婦の復讐」と呼ばせていることに端的に表れているように、作者であるミラーは、魔女狩りの大きな契機として個人的怨恨による「復讐」という側面を強調している点である。この点フォイヒトヴァンガーの場合はかなりニュアンスが違っていて、フォイヒトヴァンガーもまたそういう側面に触れてはいるが、アビゲイルとプロクター夫妻のような込み入った事情は描いておらず、証言者である少女ハンナ・パリッシュの動機としては、そういう怨恨や注目を浴びたいという欲求、および周りからの催促や行きがかり上止められないという事情を認めながらも、さらに彼女が元来非常に空想好きで時としてその空想と現実の区別がつかないという点を挙げてゐる。しかも、そういう彼女の資質は、彼女の証言のいかかわしさを推察しながらも彼女に好意を寄せるメザー牧師の息子リチャードの「彼女は詩人なのだ」(W—181)という言葉に表れているように、必ずしも非難されてばかりゐるのではない。

つまり、このように見てくると、ミラーの戯曲の場合、魔女狩りの状況のまさに否定的な側面、すなわち怨恨や嫉妬、復讐を動機としてゐること、そしてまたその標的にされた人間の苦悩を強調してゐるのに対して、フォイヒトヴァンガーの戯曲は、確かにそういう側面をはつきりと踏まえながらも、他方では加害者とみえる人間に注目し彼らに同情のこもった照明を当てることを通して、魔女狩りの状況をいわば説明しようとしてゐることが分かる。すなわち、ミラーにおいて告発し、非難する姿勢が顕著なのに対して、フォイヒトヴァンガーの場合はより中立的な状況解明的姿勢が支配的だと言わねばならない。そして、私にはこの違いが、マッカーシー旋風の吹き荒れる戦後のアメリカに対する両者のスタンスの違いをまさに正確に反映しているように思われる。すなわ

ち、移民局による不愉快きわまりない調査や喚問、そしてまた新聞や雑誌による非難キャンペーンにもかかわらず、フォイヒトヴァンガーのこの時期のアメリカに対する評価は、必ずしも否定的なものに終始するものではなかったのである。このことはまた、彼の多くの親友たち、ブレヒトやトーマス・マン、アルノルト・ツヴァイクらが次々とヨーロッパへ帰っていくなかで、しかも、そういう彼らの再三の勧誘と勧めにもかかわらず、あくまでフォイヒトヴァンガーがアメリカに留まり続けたという事実を説明する理由でもあると思われる。

もちろん、フォイヒトヴァンガーが死ぬまでアメリカに留まり続けたという事実に対しては、彼自身がヨーロッパ帰還を勧める親友たちに対する返答の中で再三繰り返しているように、彼がトーマス・マンなどとは違いアメリカの市民権を持っていない、つまり一旦アメリカを出てしまうともうアメリカへの再入国が不可能になるという事情も確かにあった。しかし、これはよく考えてみると少しおかしい説明なのであって、かりにもし彼のアメリカへの嫌悪がどうしようもないものなら、もはや再入国の心配をする必要もないのであって、市民権の問題は実際には彼にアメリカ出国を思いとどまらせた決定的な理由ではなかったと思われる。

実際また、彼がアメリカに留まったという事実に対しては、この他にもまだ二つほど理由が考えられる。まずひとつは、第一章で問題にした彼の代表作のひとつである三部作長編小説『狐たち』が戦後のヨーロッパで出版されたとき、現在は第一部の表題になっている『Waffen für Amerika (アメリカのための武器)』というタイトルがついていたこともあって、共産圏においてそのアメリカ賛美の姿勢を非難する批評が出たという、すでに言及した事件である。それは一九四八年六月のモスクワの雑誌に載った『ハリウッド文学界におけるコスモポリタン』と題された批評で、この「コスモポリタン」という言葉は現在の肯定的な意味ではまったくなく帝国主義

者というほどの意味であるが、さらにチェコスロバキアでは一時作品の出版が禁止されたこともあり、当時ロサンゼルスに住んでいたフォイヒトヴァンガーは、ベルリンに住む親友のブレヒトに遺憾げに事情を問い合わせている。<sup>(18)</sup>すでに第一章で詳述したように、なるほど小説『狐たち』にはアメリカ賛美という誤解を生む要素はあるものの、今日の目から見ればそういう非難がなんと言っても誤った作品解釈に基づいていることは確かである。フォイヒトヴァンガーは、チェコのヴァイスコプフに事情を問い合わせた手紙の中で、彼自身のことは言っていないものの、それまではヨーロッパ行きに乗り気だったハインリヒ・マンがこの事件の後急にそれを躊躇しだしたということを報告していて、これなどは明らかにコミュニズムに対して不安と躊躇もっていたフォイヒトヴァンガーが、この事件を契機としてあらためて不安の念を強くし、間接的ながらはつきりとそれを表明したものと考えられる。トーマス・マンなどとは違いソヴィエト陣営からの評価と期待が大きいかえって、彼にはうっかりアメリカを出るならとんでもない役割を演じさせられかねないという心配があったはずで、いずれにせよ彼は、コミュニズムとソヴィエト占領地域の現実に対してかなり深刻な留保をもっていたと思われる。

それと考えられるもうひとつの理由は、今の理由をヨーロッパで待ち受ける社会的状況への危惧だとするならば、移住にともなういわば自然的・物理的困難が考えられる。晩年のフォイヒトヴァンガーとトーマス・マンは家族ぐるみの極めて親密な交際を続けていたが、そのマン一家からフォイヒトヴァンガーは移住先の住宅問題や気候などの苦情をしばしば聞いていた。「ヨーロッパに移住しそこでなんとか住める家を整えるには一年か二年はかかるでしょうが、私はその時間を無駄にしたくないのです」と訴えるエーリカ・マン宛の手紙<sup>(19)</sup>を読むと、そういう物理的問題も、すでに老齢にさしかかっていたフォイヒトヴァンガーのアメリカ出国を思い留まらせてい

たひとつの理由であることが分かる。

要するに、フォイヒトヴァンガーがアメリカに留まった理由として以上のようないくつかの事情が考えられが、しかしながら、先にも述べたように、もしフォイヒトヴァンガーのアメリカに対する非難と嫌悪が決定的なものであったとしたら、それらの理由は問題になりえなかつたはずである。すなわち、フォイヒトヴァンガーは、アメリカのほうがまだましだという認識、アメリカを擁護するとまではいかなくても、少なくともアメリカを頭からは拒絶しないアメリカに対する開かれたとでも言うべき態度を持っていたと考えざるをえないのであり、そういう彼のアメリカに対する開かれた姿勢をまさに表しているのが、本稿で取り上げた彼の戯曲、横暴で残酷な魔女狩りを、アメリカニズムの根幹のひとつであるピューリタニズムの暴走した結果として救い出そうとした『ボストンの悪魔』であると言える。

もちろん、こういう彼のアメリカに対する態度に対して、あのスターリンによる肅清の嵐が吹き荒れるソヴィエトを擁護した際に彼に浴びせられたさまざまな批判のひとつ、アルフレート・デーブリーンの「ウルトラ・オプティミスト」<sup>(4)</sup>という言葉に端的に表れているような、現状認識の甘いおめでたい人間という非難を繰り返すことは容易であるし、実際またそれは完全に的外れというわけでもないであろう。マツカーシー旋風の吹き荒れるアメリカに対しては、それはあまりにも生ぬるく寛容すぎると言わねばならない。しかしながら、かといって私には、フォイヒトヴァンガーの態度をただ非難してばかりいるのも公平なことだとは思われない。というのも、当時のアメリカ批判がいかに十分な根拠がある正当なものだったにせよ、他方においてそれは、他のさまざまな不純な動機に基づいていたこともまた否定できない事実だからである。

たとえば、そこにはアメリカにおいて不遇な時代を過ごさねばならなかった亡命作家たちの怨恨というような要素が多分にあつたことは否定できないであろう。また、アメリカとソヴィエトの対立の激化と東西冷戦の始まりによつて、それぞれの陣営の強化・結束をはかるために相手陣営を攻撃するキャンペーンが展開されたことは周知の事実であり、今日よく言われるそういう東西対立の構図に基づくソヴィエト占領地区における教条的なアメリカ批判もあつた。<sup>22</sup>しかし、私がここで強調したいのは、むしろ戦争における勝者と敗者の関係の方であり、おもに西側占領地区、後の西ドイツでみられた危険な自己正当化の動機の方である。

それは、当時の資料を丹念に掘り起していけば見えてくる。たとえば、フォイヒトヴァンガーの親友のひとりであり、やはりアメリカに留まつた亡命作家であるルートヴィヒ・マルクーゼは、ニューヨークで出ていた『パルチザン・レビュー』誌の五・六月号に『一九五三年の反アメリカ主義的魔女狩り』と題した記事を載せ、当時のドイツにおける反アメリカ主義を厳しく非難している。<sup>23</sup>そこで彼は当時のドイツでベスト・セラーとなつていたエルンスト・フォン・ザロモンの『アンケート用紙』という本を取り上げ、ドイツ人に「ザロモンはあたかも何事もなかつたかのように心地よく昔に帰ることのできる切符を提供している」とザロモンを非難する。すなわち、敗戦に打ちひしがれ贖罪を迫られるドイツ人にとつて、ザロモンの提示する否定的アメリカ像はいかにも都合なものであつて、それはアメリカにドイツを裁く権利を否定することによつて、ナチズムが引き起こしたドイツの戦争責任をあいまいにし、それを消し去らないまでも軽減化するというとんでもない作用を果たしているというわけである。

しかもやつかないのは、ザロモンの本がベスト・セラーになつたという事実が端的に示しているように、ドイ

ツには反アメリカ主義をまさにそういう風に受容する反動的・復古的社會が存在したということである。すなわち、たとえ反アメリカ主義の著者たちにその意図がなかったにせよ、それはドイツでは結果的にドイツの戦争責任をあいまいにするという働きをしようという状況である。マルクーゼは先の記事より一年ほど前にスイスの『ノイエ・シュヴァイツァー・ルントシャウ』誌にも反アメリカ主義について書いているが、<sup>24</sup>そこでは戦後ドイツで押し進められた「非ナチ化」政策が東西冷戦の始まりにより大きく後退せざるをえず、その結果として反動的・復古的な動きが活発になってきた状況に触れている。そういうドイツ社會においては、アメリカを文化的伝統のない野蛮な国と決めつけ、覇権を求めるアメリカをヒトラーの第三帝國と同一視して非難する反アメリカ主義は、容易にドイツの戦争責任を軽減化するという自己正当化の役割を演じがちなのは明らかである。そういう意味でマルクーゼは、マッカーシー旋風も魔女狩りかもしれないが、当時の反アメリカ主義もまたアメリカを「スケープ・ゴート」にしてすべての罪をアメリカに押し付けようとする点で、ある種の魔女狩りに他ならないと主張するわけである。

もつとも、当時のドイツにおける反アメリカ主義に確かに見られたこういう危険な要素をフォイヒトヴァンガーがどれほど正確に知っていたかは分からない。マルクーゼが今述べた彼の評論について言及したフォイヒトヴァンガー宛ての手紙があるが、<sup>25</sup>それに対するフォイヒトヴァンガーの返信は存在していない。しかし、マルクーゼの手紙はフォイヒトヴァンガーがそういう状況について少なくとも無知ではなかったことを推察させる。なるほど、フォイヒトヴァンガーのマッカーシー旋風が吹き荒れる時代のアメリカに対する寛容な姿勢は、許される範囲を越えたものに違いない。また、マッカーシー旋風を非難するアメリカ人アーサー・ミラーの告発は真摯な

怒りに震えたもので読者の心を打たずにはいない。しかし、自分の国の問題であるミラーの場合はある意味で対処が簡単だったのであり、それに対して原罪ともいべきナチズムを経験した戦争直後のドイツ人が尻馬に乗ってアメリカ批判を展開するには、戦争責任の軽減と自己正当化という大きな誘惑が存在していた。そういう意味で、戦後のマッカーシー旋風が吹き荒れた時代におけるドイツの反アメリカ主義は、およそ外国や異文化が問題になるとき、それが陥りがちな危険を端的に示したものであるといえる。そして、そういう状況の中で見るならば、おそらくは「ウルトラ・オプティミスト」という非難を甘受しなければならぬフォイヒトヴァンガーのおめでたさも、またある種の存在意義を持つてくるものと私には思われるのである。

〈付記〉本稿は、一九九六年度日本独文学会秋期研究発表会におけるシンポジウム『ドイツ文学とアメリカ』の中の発表「反アメリカ主義の嵐の中で」を基にしたものであるが、大幅に加筆したものであることを断っておく。

### 注

フォイヒトヴァンガーの作品は、以下の版を用い、それぞれイニシャルとページ数を引用文直後に付記した。

F Gesammelte Werke in Einzelbänden. Bd. 12 Die Füchse im Weinberg. Berlin und Weimar 1994.

W Stücke in Prosa. Rudolstadt 1957.

アーサー・ミラーの [20] [24] (Arthur Miller: The Crucible) は以下の翻訳によった。

『アーサー・ミラー全集』II 倉橋健訳、早川書房、一九八四年。



(1) 旧西ドイツにおいて、「ほとんど忘れられた」作家フォイヒトヴァンガーが生誕一〇〇年にあたる一九八四年前後において幾分の注目を浴びたときも、三〇年代の活動が中心であった。Vgl. Marcel Reich-Ranicki: *Lion Feuchtwanger oder der Weltuhm und seine Folgen*. In: *Nachprüfung*. Stuttgart 1980, S. 164. 長橋美生子らの数少ない研究が存在するだけの日本の場合も同じ状況であり、旧東ドイツにおいて公平なアメリカ時代の研究が不可能であったことは言うまでもない。拙稿「リオン・フォイヒトヴァンガーの歴史小説」(日本独文学会「ドイツ文学」八二号)参照。

(2) 『アメリカの民主政治』(井伊玄太郎訳 講談社 一九八七年)下、二二頁。

(3) たとえば『アメリカン・マインドの終焉』においてアラン・ブルームは、アメリカを思想を欠いた単に実利的な国家と見なす紋切り型の批判は見当はずれで、むしろ個人主義と自由という近代の理念をラディカルに実践しそれを表現してしまった所にこそ現在のアメリカが抱える問題点があると分析している。『アメリカン・マインドの終焉』(Allan Bloom: *The Closing of the American Mind*. New York 1987. 菅野盾樹訳 みすず書房 一九八八年)参照。

(4) フォイヒトヴァンガーは、ドイツにアメリカニズムの大きな波が押し寄せた(黄金の二〇年代)に、まさにそういうアメリカニズムの軽薄さを揶揄した風刺詩 *Pep* (1928) を、自らの名前を英訳した架空の詩人「Weicheek」の作品を翻訳したものととして *Berliner Tageblatt* に載せようとした。Vgl. Gerd Brendel: *Der Amerikanismus im Spiegel der Satire: Lion Feuchtwangers amerikanisches Liederbuch Pep*. In: *Deutschlands literarisches Amerika*. Hrsg. von Alexander Ritter. Hildesheim und New York 1977.

(5) 小説「狐たち」を紹介するときに必ずといついては引用されるこの説明は、一九五二年のアウフバウ社版の「あとがき」の中の作者の言葉である。Die Füchse im Weinberg. Aufbau 1952, S. 951. Vgl. Reinhold Jaretsky: *Lion Feuchtwanger*. Hamburg 1984, S. 116.

(6) 斉藤眞『アメリカとは何か』(平凡社 一九九五年)参照。

(7) L. Feuchtwanger: *Zu meinem Roman »Waffen für Amerika«* (1954). In: *Ein Buch nur für meine Freunde*. Frankfurt am Main 1984, S. 401.

- (8) 島田真杉『非米活動委員会とハリウッド』(アメリカ学会『アメリカ研究』第二五号、一九九一年、六三—八二頁)参照。
- (9) Thomas Mann: *Tagebücher 1949-1950*, Hrsg. von Inge Jens, Frankfurt am Main 1991.
- (10) L. Feuchtwanger: *Briefwechsel mit Freunden 1933-1958*, Berlin und Weimar 1991, Bd. 1., S. 144.
- (11) たとえば次のような立ち入った質問がなされた。「そのような委員会に呼び出され、共産党のメンバーだと実際にあなたが知っている人物の名前を言うように求められたら、情報を知らせますか、あるいは修正第五条に従い答えを拒否しますか?」Vgl. Alexander Stephan: *Lion Feuchtwanger: Die FBI-Akte*. In: *Die Resonanz des Exils*. Amsterdam und Atlanta 1992, S. 73.
- (12) *Briefwechsel mit Freunden 1933-1958*, a.a.O., Bd. 1., S. 71.
- (13) 一九四九年四月一九日のA・ツヴァイク宛の手紙。Lion Feuchtwanger Arnold Zweig *Briefwechsel 1933-1958*, Berlin und Weimar 1984.
- (14) 渡辺利雄『フランクリンとアメリカ文学』(研究社、一九八〇年)参照。
- (15) 『アメリカン・マインドの終焉』上掲書。
- (16) 『アーサー・ミラー自伝』(Timebends, A Life, 1987)倉橋建訳、早川書房、一九九六年。
- (17) たとえば一九四八年三月九日のF・C・ヴァイスコップ宛の手紙:「私自身ヨーロッパへ一度行きたいのですが、ご存じのように私は相変わらず敵性国人(enemy alien)ですので、すでにパスポート上からしてそれは困難です」や一九四八年五月六日のフレッド宛の手紙:「私が国を離れた場合、今日のような状況では、一度帰国(ヒェナウ)にたいして、Vgl. *Briefwechsel mit Freunden 1933-1958*, a.a.O.
- (18) *Briefwechsel mit Freunden 1933-1958*, a.a.O., Bd. 1., S. 77.
- (19) *Briefwechsel mit Freunden 1933-1958*, a.a.O., Bd. 2., S. 99.
- (20) *Briefwechsel mit Freunden 1933-1958*, a.a.O., Bd. 1., S. 175.
- (21) Alfred Döblin: *Briefe*, Othen 1970, S. 256.
- (22) 山口知三『廃墟をよまよう人々』(人文書院、一九九六年)参照。

- (23) Ludwig Marcuse: *The Anti-American Witch Hunt in the Year 1953*. In: *Partisan Review*. New York 1954, S. 347-352.
- (24) Ludwig Marcuse: *Der europäische Anti-Amerikanismus*. In: *Neue Schweizer Rundschau*. Zürich 1953, Heft 2., S. 67-73.
- (25) *Briefwechsel mit Freunden 1933-1958*, a.a.O., Bd. 2., S. 19.